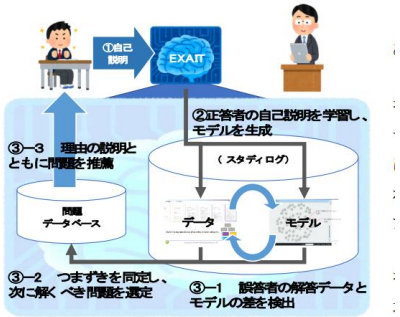
京都大学　京都市との連携事例

自治体の課題（ニーズ）

京都市では、児童・生徒一人一台の端末整備が加速しており、テスト等をコンピュータで実施するCBT（Computer Based Testing）も行われるなど、データを蓄積できる環境も整ってきていることに加えて、大学においても、そのデータを活かすために教育現場におけるAI活用の研究も進展している。

一方で、学校教育現場では、AIが解析したデータに児童・生徒（学習者）が納得できなければ、主体的な学習への意欲が引き出せないという課題が存在。

研究成果（シーズ）の還元



AIが解析したデータとして、単に問題が自動的に提示されるだけではなく、学習者がより納得して課題に取り組めたり、先生が児童生徒のつまづきを把握して適切な指導を行えるよう、より学習・指導に有効な分析データを導き出す「説明できるAI」の開発を行うほか、実証研究を実施している。

京都市と連携（実証校でのシステム導入）を行い、AIシステムの開発・実証を通じて、教育現場で本当に活用されるための教育AI技術の確立を目指していく。

■　この連携に携わった研究者

学術情報メディアセンター
緒方　広明　教授

（研究者の経歴）

1998年5月博士（工学）、徳島大学。 2017年4月より現職。
人々の学びを支援する情報技術の開発を中心に、モバイル・ユビキタスラーニング（Computer Supported Mobile and Ubiquitous Learning）、協調学習環境、CSCL（Computer Supported Collaborative Learning）、ラーニングアナリティクス、教育ビッグデータ、教育データサイエンス、教育情報学、教育工学等の研究に従事。